

【聖書箇所】

14 イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。15 イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。16 イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。18 「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、19 主の恵みの年を告げるためである。」20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。22 皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」23 イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」24 そして、言われた。「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。25 確かに言っておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、26 エリヤはその中のだれのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。27 また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」28 これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、29 総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。30 しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

1 どうしてナザレ？

先週に引き続き主イエスの伝道活動開始の物語をみていきたいと思います。このエピソードを繰り返し読むと、いくつか不思議な点がある事に気づきます。まず不思議だなあと思うのは、ルカが主イエスの伝道活動の冒頭に故郷ナザレでの出来事をもってきている事です。マルコによる福音書やマタイによる福音書では、ナザレで主イエスが受け入れられなかったエピソードは、ガリラヤで伝道を始めてからしばらくしてから事として描かれているからです。

ルカはカファルナウムなどその他の地域で成功した様子を伝える記事よりも先に惨めな結果に終わったナザレでの伝道の様子を記しています。何故でしょうか？ルカは、福音書の先頭で、「わたしもすべての事を始めから詳しく調べていますので、順序正しく書いた」(1:3)と宣言する程にその順番には気を配っていました。だから、主イエスが故郷ナザレで受け入れられなかった出来事を伝道開始の最初に描いたのには、深い意味がある筈です。今日はそれをご一緒に考えていきたいと思えます。

2 聖霊に満たされて

14節から15節では、主イエスは聖霊の力に満たされて、荒れ野からガリラヤ地方に戻って来たとあります。主イエスは、ほとぼしり出るような喜びに輝き、壮絶な誘惑に父なる神を信頼しきって耐えぬいた落ち着きのうちに、霊なる神が臨在する威厳をもって伝道を始められたことでしょうか。荒れ野に出かける前とは、見違えるほどに変わっておられたのではないのでしょうか。そして、神の力と恵みに溢れた言葉を語り、聖霊の力によって奇跡を行っておられた。その具体的な様子は、今日の聖書箇所の後、ルカ福音書4:31以降に描かれています。主イエスの評判はガリラヤ地方を瞬く間に駆け巡り、皆こぞって、主イエスに溢れる聖霊の力に圧倒され賛美しています。

3 ナザレでの礼拝

その“時の人”が故郷の町へと帰ってこられました。ナザレの町の人々が聖霊の力あふれる主イエスを驚きと好奇の目をもって眺めていた様子が目に浮かびます。故郷ナザレの町の会堂、慣れ親しんだ会堂で、主イエスも幼い頃から守って来た礼拝が始まります。当時の会堂での礼拝では、ユダヤ人の成人男性であればだれでも自由に預言書の朗読ができたそうです。ですから、主イエスも立ってイザヤ書61章を朗読しました。通常は、預言者の書は朗読されるだけで、聖書の取り次ぎはなかったようです。しかし、故郷の人々は、「他の町の会堂で語っているような力強く恵みに満ちた神のみ言葉が聞きたい」と思い、主イエスがイザヤ書の取り次ぎをするのを待ちました。会堂中の人々の目が、イエスに注がれています。

主イエスは張り詰める空気の中立ち上がり、高らかに宣言しました。「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にした時に実現した」(4:21)。

それは、マルコ福音書で主イエスが宣教活動の最初に宣言した「時は満ち神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という言葉と同じでありました。主イエスご自身が、囚われ人を解放し、目の見えない人を見えるようにし、圧迫された人を解放する神の恵みの支配を今もたらず

…という宣言、御霊の力に満ちた伝道開始を告げる宣言がナザレの会堂に響

き渡ります。

4 口から出る恵みの言葉

その後に語られた主イエスの言葉はどのようなものであったでしょうか？ルカは22節で「その口から出る恵みの言葉」という表現しています。普通に「主が話された」と記せばいいところを、ルカはわざわざ「口から出る言葉」というもってまわった表現を使っています。「口から出る言葉」という言い方は、4章3節以下の荒れ野での悪魔の第一の誘惑を思い起させます。四十日四十夜の何も食わずに悪魔からの誘惑と戦っておられた主イエスは、その期間を終えた時、空腹を覚えられました。そんな主に対して、悪魔は荒野に転がる石を指さし「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」とささやきます。主イエスは『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」と答え、悪魔の誘惑を斥けます。これは旧約聖書の申命記8：3に出てくる言葉であり、『人は主の口から出るすべての言葉によって生きる』と続きます。“人はパンだけでは生きていけない、神の口から出る一つ一つの言葉こそが人に命を与え生かす”という意味です。ルカはこの言葉を念頭に、イエスさまがナザレの会堂の礼拝でお語りになった言葉が、まことに人を生かす命の言葉であった、神の言葉であった…と告げているのです。

5 不思議な一文

恵みの言葉を聴いたナザレの人々は、主イエスをほめて驚いた…とあります。22節です。しかし、この22節、なんだか違和感があります。この直後、主イエスは、強い言葉でナザレの人々を批難します。そしてナザレの人々は主を町から追い出し崖から突き落とそうとするのです。語られる言葉に驚嘆し賞賛をささげる聴衆と、この後の展開が結びつきません。恵みの言葉に驚き賞賛していた人々を、主はどうして非難したのか、ナザレの人々はどのようにして主を殺そうとまでしたのか？22節の表現は、とてもちぐはぐに思えるのです。

しかし、ルカは非常に細心の注意を払いつつ、ナザレの人々の心の動きの中に潜む人間の本質を22節で描き出そうとしているのです。少し詳しく22節をみて行こうと思います。

6 賞賛が非難へ

人の評価とは不確実なもの、あてにならないものです。昨日まで人々から絶賛されていた人物でも、一旦不祥事が明らかになると、手の平を返したように一斉に批難し始める…というのは現代でもよくある事です。人間に対してだけではなく、神に対しても私たちは同じ態度をとります。神の愛を知った

当初は、「なんと恵み深いお方なのだ！」と感動し神をほめたたえます。しかし、だんだんと神に愛されていることが当たり前となる。そして神の愛が自分の望む程に感じられなくなると、神を非難し始める…それは私たちがみな経験する事でしょう。

ルカはそんな人間の様子を22節の「ほめる」という言葉を使って表しています。この「ほめる」と訳されているギリシャ語は、「証言する」「説明する」という意味がある言葉です。皆さん、どうでしょうか？皆さんが何かを証言しようとする時、対象を観察し判断し評価しないでしょうか。ある出来事に遭遇したら、自分が経験して評価し真実だと判断した事を人々は証言します。

ですから、この時、ナザレの人々は、主イエスの口から出る言葉を、「これこそ自分を生かす神の言葉だ」と無条件に受け入れてはいるわけではない、彼らは主イエスが仰る事が自分達の考えとあっているか、もっと率直に言えば、「自分達の気に入るか、気に入らないか」で評価し判断したのです。だから、主イエスの言葉が気に入れば、「素晴らしい」という賞賛の証言になります。逆に気に入らなければ「とんでもない取り次ぎだ」という証言にもなり得ます。実際、22節の「ほめて」を「批難して」と訳す人もいるようです。

7 驚嘆が疑いに

また22節の「驚いて」という言葉も、相反する意味を持つ言葉です。この原語のギリシャ語には、驚くと同時に「怪しむ」「怪訝に思う」という意味があるのです。ナザレの人々は、初めは主イエスが聖霊に溢れて語られる言葉の持つ力に圧倒され驚嘆していたでしょう。しかし、やがて、怪しむようになります。「この人は大工のヨセフの所の長男坊じゃないか。我々もよく知っている者ではないか。その者が、今までどの預言者も語れなかったような大胆な言葉、“救いが今こそやって来た”と語れるのだろうか」といぶかるようになりました。「これは本当に神の言葉なのかな」と疑う心が芽生えていったのです。「幼い頃からよく知っている、あのヨセフの息子が救い主なんて！」と妬みが働いていたのかもしれない。

神の救いが現れる時、また人間の罪も顕わになる…その様子をルカは両極端の意味に受け取れる単語を使って描き出しています。

8 神を試みる

そのようなナザレの人々に対し、主イエスは「医者よ、自分自身を癒せ」というよくある諺をひいて、彼らが奇跡を強要するようになると予告します。ここに出てくる“カファルナウム”はガリラヤ湖のほとりにある町です。ローマ兵の駐屯地もあり、外国人が多い町でもありました。ナザレとの距離が近いせいか、ナザレの町の人々はカファルナウムの人々に対してライバル意識を持っ

ていたとも言われています。「あのカファルナウムで奇跡をしたのなら、故郷であるこのナザレでも奇跡を起こしてくれ。そうしたら、あなたを救い主だと信じよう」それがナザレの人々の心の内の思いでした。

9 偶像

主イエスは、ここで、ナザレの人々の期待に応えて、奇跡を起こす事は簡単だったでしょう。そこにいる病人の病気を癒す事もできた筈。しかし、主はそうはなさらなかった。人々の気に入る救い主になる事を拒否しておられるのです。それは、「あなたが神の子ならば、ここから飛び降りるがいい」と高い神殿の屋根の上に立たせてイエスさまを誘った悪魔の誘惑と同じであるからです。つまり、私たち人間は、神に対して、主イエスに対して、悪魔の思いすら抱くことがあるのです。

私たち人間は、自分が納得するような救いを、自分が気に入るような救い主を、自分に都合のよい神を期待します。神さまは、自分が思うところの神さまらしく振舞うのが当然だと思っております。そしてそういう神なら気に入った、と歓迎します。

そのような人間がつくりだした神々がこの現代世界にも沢山存在します。それが偶像です。ナザレの人々は、主イエスを偶像にしたかった、そうして崇めたたてまつって自分達に都合のよい事ばかりを叶えてほしかったのです。そうでない神は要らない…偶像とは気に入らなければ捨ててしまえる程度のものなのです。そして、私たちは、真の神、私たちをその身を賭して滅びから救い出そうとされている神を、自分達の気に入らないからと言って拒む者であります。

十字架の上に呻き苦しむ主イエスに向かって「神の子なら自分自身を救ってみろ」と嘲りの言葉を投げつける律法学者や祭司達。「奇跡を起こせば信じてやろう」というナザレの人々。両者の姿がびたりと重なります。

10 サレプタのやもめとナアマン

だからこそ、主イエスはナザレの人々にエリヤとエリシャの奇跡の物語を語り、彼らの罪を指摘し徹底的に打ち砕こうとなさいます。

エリヤの話とは列王記上 17:8~24 に出てきます。エリヤは主なる神のみ言葉を預言したので国を追われ、サレプタの一人のやもめのところで長い間養われた…という話です。大勢のやもめがその当時いたのに、このやもめだけが神の業のために選ばれ救われました。

シリアのナアマンの話は列王記下 5 章に書いてあることです。ナアマンは大変優れた将軍でしたが、重い皮膚病を病んでいました。それがヨルダン川に浸って身をきよめることによって癒された、という話です。これもルカによる福音書で主イエスによって語られているように、この当時、イスラエルには多く

の皮膚病の人がいたはずですが。それなのに、ここで癒されたのは、外国の将軍のナアマンただ一人でした。

両方の話に共通なことは、信仰者の中に多くのやもめがいたのに、神を信じていない外国のやもめだけが救われた、あるいは、多くの皮膚病の信仰者がいたのに、信仰者でない外国の将軍だけが救われた、ということです。つまり、「この人は救われるべきだ」と人間が考える人ではなくて、人間が「救われる筈がない」と考えるような二人を神は特に選んで救われた…という話です。主イエスは、エリヤとエリシャの話の引いて、信仰者である自分達は救われるべきだと思っているナザレの人々に、「あなた方は自分達に都合のよい神を作って、自分達は救われて当然と思っている。しかし、それは真の神ではない。あなたがたが救われる事はない」と彼らの罪を鋭く指摘しているのです。

11 神の恵みの途方もなさ

しかし、勘違いしてはいけません。神は気ままに人を救ったり、滅ぼしたりする方ではありません。主イエスはこの神の不思議な選びの物語を通じて、神は人の思いや考えに縛られるお方ではなく、完全に自由なお方であり、その完全な自由を、罪の呪縛に苦しむ人間を憐み愛する事に徹底的に用いられる…という事を伝えておられるのです。

神は人間にどんな条件も求めず、自由に大胆に恵みを与えて下さいます。人間側にはどんな条件も必要ありません。ただ神の恵みによってだけ人は救われるのです。信仰者でない二人の者の選びを通じて主はその事を伝えたかったのです。だから、自分達に都合のよい神を求めるのではなくて、この大きくて広くて高く深い神の愛に立ち帰りなさい。ただ神を信頼しなさい…とナザレの人々を主は招いておられるのです。

12 自分を明け渡す

しかし、私たち自身は、どうしても自分達を神としてしまい、神を神として信じ従う事はなかなかできません。だからこそ、私たちは、そんな自分達の罪をしっかりと見つめて「神さま、私の負けです。あなたは私の神ですから、私の思いではなくあなたの思いのみになりますように」と一旦神さまの前に自分を明け渡す必要があります。敗北宣言する必要があるのです。

惨めな敗北宣言でしょうか？いえ、違うのです。私たちがふんぞり返っていた王座を主イエスに譲ったその時、不思議な事ですが、神の憐みが私たちの内に押し寄せてきます、湧き上がってきます。何故なら、神に完全に信頼し、自分を明け渡す…というのは、他の誰でもない、主イエスのお姿だからです。

イエスさまは十字架にかかる前の晩、血の汗を流しながら祈りました。全ての者の罪を贖う十字架の刑罰、徹底した滅び。それがどんなに苦しく辛い事で

あるのかをよくご存じだったのです。だからこそ十字架を避けてください…と父なる神に切に祈られました。ですが、主はこうも祈られました。「しかし、私の願いではなく、御心のままに行ってください」(ルカ 22:42)。自分が愛する父なる神に見放され滅ぼされる事は耐えがたい、なんとしても避けたい、避けてほしい。だけれども、それがあなたの願いであるのなら、致し方ありません。あなたは私の神なのですから、私はあなたに従います…と主イエスは額づいて祈ったのです。

私たちが、主イエスに倣って父なる神に対して自分を明け渡す時、この神の独り子の霊が私たちに注がれ、私たちは、キリストの平安を得ることができます。キリストの信仰の内に父なる神の愛にやすらかに憩う事ができます。

13 主イエスを殺そうとするナザレの人々

ですが、ナザレの人々は主の言葉の真の意味が理解できませんでした。自分達を神としていたから。当時の律法では、神を冒瀆した者は石打ちの刑に処せられる…とありました。石打ちの刑は、石を人に投げつけるだけではありません。人を石に打ち当てることもありました。ですから、29節の「崖から突き落とす」とは、主イエスを石打ちの刑で処刑しようとしていたのです。ナザレの人々は、主イエスを町の外へ追い出し死刑にしようとしたのです。

この町の外に追い出す…の「追い出す」という単語も非常に乱暴な言葉が使われています。直訳すると、「彼を町の外に投げ出し」です。「外へ投げ出す」と言われるほどに、乱暴に主イエスを扱って町の外の崖の上ままで連れて行くナザレの人々。彼らの姿の向こうには、主を十字架につける！と叫ぶエルサレムの民衆の狂気の姿、残忍に主イエスをリンチするローマ兵の姿があります。

14 主イエスの十字架

このエピソードは、まさにこれから始まる主イエスの道象徴しているようです。ルカは伝道活動の冒頭にこのエピソードを置き、既に主イエスによって始まっている神の恵みの支配とそれに対抗するナザレの人々の姿を通して、神の愛と人の罪を鮮やかに物語っています。それがカファルナウムでの主の働きの前に、ナザレでのエピソードを記している理由でもあります。まさに主イエスの伝道は、使徒信条の言う「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみをうけ」だったのです。

ルカが描くように主イエスの伝道の日々は、人の罪との戦いの日々でありました。しかし、主イエスは、人を徹底的に深く憐れむ事で戦われました。それは最後の時までそうでした。主を十字架につける私たち人間に対して、主が「父よ、彼らをおゆるし下さい。自分が何をしているのか知らないのです」と父なる神に赦しを願い、最後まで罪びとを招き続けたのです。そんな主イエスを神

は三日後に甦らせました。主イエスの愛がこの世の殺意に打ち勝った事を宣言したのです。キリスト・イエスは勝利されました。そして、キリスト・イエスの十字架と復活であらわされる神の義なる愛が多くの人々を神へと立ち帰らせたのです。救いの「今日」をもたらし続けています。

それはこのナザレでのエピソードが後世に伝わっていた事からも判ります。このエピソードの当事者で、主の言葉を理解せずに、主を殺そうとしたナザレの人のうち、後になって教会に連なった人がいたに違いありません。その人がこのエピソードをルカの教会に伝えました。だから、こうして書き残されているのです。この名もなきナザレ人は、主を殺そうとした自分をも招き続け、悔い改めへと導く主イエスに出会ったのでしょうか。神を神とできず己が神となっていた自分の罪を悔い改めてキリストのもとに立ち帰りました。そうして見えてなかった目に視力が回復し、罪の束縛から解放されたのです。まさに主の恵みの言葉によって、救われたのです。

私たちは、午後から教会総会を持ち、2018年度の活動を皆で話し合います。私たちもまた横浜ナザレン教会、ナザレ人の教会です。自分達の気に入る神を求めて、真の神を崖から突き落とそうとした深い罪を悔い改め、神の御許に立ち帰り、神の救いの業—キリスト・イエスの十字架と復活を宣べ伝えた、この名もなきナザレ人とさせてもらいたい、罪赦された罪びととして主の救いの御業を宣べ伝えていく…そのような横浜ナザレン教会でありたいと、切に祈ります。